

## 30 九州における医史学研究的系譜

(一) 岩熊哲の業績とその医史学観について

佐藤 裕

昭和十八年四月、四十五歳という若さで急逝した岩熊哲は、優れた語学力をもって「解体新書を中心とする解剖書誌」や「医史学論考」などを著し、医史学研究に一時代を画した。そのうち「解体新書を中心とした解剖書誌」は、解体新書の「凡例」に掲げられた数種のオランダ解剖書 (Johann Adam Kulmus, Thomas Bartholin, Yohan Palfin, Johann Vesting の解剖書) についての書誌研究をまとめたものであり、クルムス以外の解剖書についての書誌学的研究は、おそらくこの岩熊の研究が始めてであろう。なかでも、解体新書において、「東米私(トニミュス)」と表記されている「トーマス・バルトリン」解体書、岩熊が当時の解剖書としては最大級の賛辞を送る「ヘスリンキース(近代解剖学を樹立したヴェザリウスか

ら六代後の教授)」解体書、十七世紀末から「バルトリン」解体書に代わって広く普及し、岩熊がクルムスの「ダーヘル・アナトミア」にもそれから多くの図案が採り入れられていると考証した「ヘルヘイン (Philip Verheyen; 1648-1710)」解体書については、直接オランダ語の原典(一部はラテン語版)にあたり、氏の優れた語学力をもって解読しており、ある意味で岩熊編の新「解体新書」となっていると言つて過言ではない。付録として、その図案が解体新書の扉絵にも採り入れられている「ワルエルダ (Juan Valverde de Hamusco)」解剖書に関する、本邦でも最も初期にあたるものと考えられる書誌研究が載せられている。その自序には、今後とも医史学研究が益々進展していくようにとの願いを込めて以下のように記されている。「私は東西医学史の比較研究と言う立場から、原本の identification を行い、当時わが邦へ舶載されていた西洋解剖書はどんな種類で、どの程度のものであったか、その原著者はどんな人物であったか、更にさかのぼって本邦へ渡来直前の西洋解剖学は、どんなものであったかを究めようとした。この研究はまだまだ完成していな

いが、之まで得た成果を一応ここに纏めておく。この書誌の未完成の部分は、私も今後務めるつもりであるが、世の篤学者の補修にまたねばならぬ。

一方、「医史学論考」は二部に分かれ、第一部は概論として岩熊の医史学観（「医学史とは、数千年にわたる辛苦惨憺の足跡であり、系譜である」から、「医史学」とはすなわち医術の領域における過去の変遷を考究し、それによって現在の方位を識り、将来の動向に備えんとする学問である）を述べながら、東西名医を比較論考しており、第二部ではアンブル（Ambroise Pare）外科書の書誌研究やそれを底本とした榎林鎮山著の「外科宗傳」との比較研究、また宇田川玄真の「医範提綱」の底本となった解剖書を著したオランダのブランカール（Stephen Blankart; 1650-1702）の人物とその著述に関する考証がみられる。最後の付録が、かつて岩崎克己氏が、今後この分野の研究に大いに役立つであろうと絶賛した「南蛮流及び紅毛流外科医が使用せる外来術語」である。

岩熊哲は昭和十八年に急逝するその直前まで、九大医報（九大医学部の校内誌）に「杏仁医館随筆」を連載して

いたが、「五十九、筆を断つ」が、絶筆となった。後世の医史学研究者に対する「エール」とも言えるこの論述を掲げて締めとする。「今、私の許には医史学に関する図書や史料がかなり集まっている。——なかには非常に貴重な本もある。——死蔵、散逸されるのは遺憾である。——学内に杏仁館文庫として保存し、九大医学部に医史研究のさかんに興ることを切望している。私がやり残している東西医史の比較総合研究を続けて呉れる人が現はるれば、私の本望は達せられる。けだし、久保—小川両先生このかた、九大の医史研究は世界史観的である所に特徴があるのだから」。

（日本医史学会福岡地方会）